



POLE

第71号 2011.9.1
北海道ポーランド文化協会誌

発行
北海道ポーランド文化協会
〒001-0032
札幌市北区北 32 条
西 5 丁目 2-31-902
佐光方
電話・FAX
011-790-8610



コンサート
報告

北海道ポーランド文化協会
Concert

コンサートを終えて



フレデリック・
フランソワ・ショパン
(1810-1849)
Fryderyk Franciszek
Chopin

私達ポ文協音楽部門は、重い雲が垂れこめる6月4日(土)、4回目の演奏会を札幌サンプラザ・コンサートホールで開催させていただきました。

演奏会への客足は、天候にかなり左右されず。当日も、演奏会開始時刻が迫るにつれて時折雨がばらつき、予想の7割か8割のお客様かしらと、と心配になってきました。加えて、英国、ヨーロッパでの演奏旅行から帰国した札幌交響楽団の「キタラ」での凱旋コンサートが重なり、しかもソリストが才色兼備の誉れ高いヴァイオリニスト・諏訪内晶子さん、と聞けば、すでに結果は見えていました。案の定、出演者の真摯な演奏にも関わらず、客席には寒い風が吹いてしまいました。

私達は、音楽関係の団体では無いポ文協が主催する演奏会には、それなりの役割が有ると理解し、これまでも特徴ある演奏会を目指して来ました。ショパン及び彼に纏わる作曲家の作品、ポーランドに関わる作品、そしてポーランドの作曲家の知られざる作品に拘ってプログラミングをしてきました。それなりの成果を上げてきたのではないかと自負していますが、今回、お客様はやはりショパンの作品、殊に名曲と呼ばれる作品を期待していらっしゃる事が明白になりました。チラシを見ても、知らない作曲家、知らない作品ばかりで興味を持っていない、とのご意見をいただいてしまったのです。

様々辛く悲しく、反省の多い演奏会になってしまいましたが、救いは駐日ポーランド共和国大使館のドミニカ・ヤキモヴィッチ・ブワッシュク領事がお出かけくださり、とても喜んでくださった事でした。ドミニカ領事は若く美しく非常に気さくで、演奏会から打ち上げまで心から楽しんでくださった様で、少々落ち込んでいた私達も、楽しい時間を過ごす事ができました。今回も、発券から当日のお手伝いまで、親身なお力添えを下さいました会員の皆様、運営委員の皆様にご心から御礼申し上げます。有難うございました。また、出演者でもありました名取百合子さんのご主人・名取博様が、立派なCD、DVDを造って下さいました。出演者一同感謝いたしております。

来年は創立25周年の記念の年です。このたびの反省を生かして、皆様に存分に楽しんで頂ける演奏会を「キタラ 小ホール」で5月12日に開催予定です。皆様これからも変わらぬ温かなご支援とご協力を、くれぐれも宜しくお願い申し上げます。

薄井豊美(うすい・とよみ=当協会・演奏部会)

プログラム・ノートは次ページをご参照ください。



Dominika
JAKIMOWICZ-BŁASZCZYK
ドミニカ・ヤキモヴィッチ・ブワッシュク
領事がご来札！



❦❦❦ *Program notes* ❦❦❦



フランツ・リスト
(1811-1886)
Franz Liszt

1830年、ポーランドから世界への楽旅を目指したショパンが、旅の途中でワルシャワ陥落を知り、失意の中パリに到着して以来支えたのは、生誕200年を迎えるF.リスト。彼は、非常に優れたピアニストとして活躍し、交響詩という新分野を開拓し、教育者としても大きな影響を後世に遺した。数多いオリジナルのほかにも、他人の作品を美しく、ピアニステックに変貌した「ショパンによる6つのポーランド歌曲」、またモーツァルトのオペラを基にした「ドン・ジョバンニの回想」などもある。

色・光・音・香等あらゆる感覚に基づく総合芸術の中に、神との合一、全宇宙の統合を目指し、神秘主義と呼ばれる音楽を意図したスクリャービン。即興演奏を非常に好んだ彼の作曲活動はベートーベン、ショパン、リストへの敬愛から始まっている。「幻想ソナタ」はベートーベンの立体的動機労作や論理的な楽曲構成、ショパンの抒情性、リストの演奏技巧を巧みに組み合わせ、独自の境地をひらくことに成功している作品。



AN.スクリャービン
(1872-1915)
Александр
Николаевич
Скрябин



イグナツィ・パデレフスキ
(1860-1941)
Ignacy Jan
Paderewski

I.J.パデレフスキはピアニスト、作曲家、政治家、実業家という多才な人物。貨車1台を借り切って、愛用ピアノ、専属調律師、料理人、家族を引き連れ専用の時刻表で移動したという。「メヌエット」が最も有名で、二部で演奏する「協奏曲」を知る人は少ない。彼の重要な業績は、ショパンの全作品編集や、第1次大戦末期、ユダヤ系ポーランド人として武力蜂起を促し、1919年には新生独立ポーランドの首相、外務大臣にもなったことだ。

M.モシュコフスキはポーランドに生まれドイツで教育を受け、後に同地で教鞭も取っていた。1897年以降生活の場をパリに定め、南欧の音楽の影響を受けつつ、お洒落で小粋なサロン用ピアノ小品を多く遺している。「スペイン奇想曲」も二部のデュオ3曲もその特徴をよく表した華やかな佳曲である。



モーリッツ・モシュコフスキ
(1854-1925)
Moszkowski,
Moritz

ショパンは生涯をとおしてノクターンを21曲遺している。「ノクターン」は、夜想曲と訳されるが、その発端は英国の作曲家J.フィールドに遡る。決して邪魔をしない伴奏の上にひたすら美しいメロディが奏でられる。「Op.48-1、2」はショパン円熟期の作品であり、その音楽は壮大であり、高貴な情緒を湛えた密度の濃い名曲。憂いを秘めた甘く物悲しくも美しい旋律は心に深くしみる。



フレデリック・フランソワ・ショパン
(1810-1849)
Fryderyk Franciszek
Chopin

❦❦❦ *Program* ❦❦❦

I 「ソロ」

◆石澤 麻里

ショパン/ノクターン

No.13 Op.48-1 c・moll

No.14 Op.48-2 fis・moll

◆木曾 育恵

I.J.パデレフスキ/メヌエット

Op.14-1 G・dur

M. モシュコフスキ/スペイン奇想曲

Op.37

◆川本 彰子

F.ショパン=F. リスト

ショパンによる6つのポーランド歌曲

Op.74

◆高橋健一郎

A.N.スクリャービン/ソナタ

No.2「幻想」Op.19 gis・moll

II 「デュオ」

◆安藤むつみ・名取百合子

M. モシュコフスキ

サラバンド D・dur

パスピエ A・der

マズルカ D・dur

◆高島真知子・薄井豊美

I.J.パデレフスキ/ピアノコンチェルト

Op.17 a・moll 1楽章

◆本田真紀子・名取百合子

F.リスト/ ドン・ジョバンニの回想

< 第 56 回例会の報告 >

領事来札記念 映画上映会



めまぐるしいスケジュールをこなされた、とてもエレガントなブウアシュチクヤキモヴィチ領事

前日の朝、千歳空港でお出迎えし、その足で苫小牧の「アイヌ民族博物館」を視察。夕方、札幌入りコンサートにご臨席され、舞台挨拶。演奏者との懇親会は深夜にまでおよんだ。当日は、朝から北海道大学の学祭へ行き、在札ポーランド人の模擬店を激励。その後、第 56 回例会会場に。さらに「水曜昼食会 500 回記念パーティ」(6 頁ご参照) 会場に移動し、ご挨拶と交流会。夜の航空機で東京に戻られた。美しすぎる領事とハグをして別れを惜しみつつ、再会を約束した。(氏間)

2011 年 6 月 5 日、札幌全日空ホテルで当協会の第 56 回例会として「ポーランド共和国大使館領事来札記念映画上映会」が行われ、参加者は 25 名であった。シャンデリアの煌々少人数の集いにぴったりの部屋がホテルのご好意により提供された。今回は、前日に札幌サンプラザで開催されたピアノコンサートのスピノフ企画として、ショパンにまつわる短編映画を 2 本上映した。

映画そのものは、ポーランドの観光名所を、ショパンの生涯に重ねて紹介するという、プロモーション的な内容であった。美しい映像と心地よい音楽が流れるなか、ポーランドへ行ったことのない人にはうってつけのガイドも兼ねていて評判もよかった。

そして、映画よりも例会を充実したものにしてくださったのが、ドミニカ・ヤキモヴィッチ・ブウアシュチク領事である。映画の簡単な解説はもちろん、上映後の出席者との質疑応答を兼ねたフリートークは、領事の知性と誠実なお人柄が伺え、素晴らしい時間となった。

映画の中で紹介されていた、ショパンの姉がフランスから彼の心臓を持ちかえったというエピソードに対し、「具体的にどうやって」という質問が出たり、イサム・ノグチの母の生涯を描き、札幌でも公開された日本映画『レオニー』の音楽を作曲しているヤン・カチュマレクに関する話題が出るなど、企画者である事務局の想定を超える話題の展開に、とても楽しいひと時を過ごせた。お若いにもかかわらず、芸術・文化に造詣の深いドミニカ領事をまたお招きして、魅力的なイベントを企画したいと思いますので、ぜひお楽しみに。(佐光事務局長)

上映作品 一道内初公開 (駐日ポーランド大使館提供作品)

『ショパンのワルシャワ』(30分) (日本語字幕付)

ショパンが青年時代を過ごした都市として、ヨーロッパの近代的な都会でありながら、深い歴史を持つワルシャワ市の魅力を堪能。19 世紀の若いショパンが知る町やゆかりのある場所を描いた映画。

『フレデリック 2010』(23分)

ショパンが亡命する以前の、ポーランドにおける彼の愛する土地、街を通し、彼の生きたポーランドを再構築する試みの作品。風景、建築物を、映像により、造形的に、無機質に表現することによって、観る者はそこに生きた生命を自分自身で創造しなければならない。「ショパン=ピアノの詩人」という決まり文句をかなぐり捨て、自由に想像することを可能にする懐の深さこそ、ショパンの持つ現代性だとの、メッセージが感じられる、ミュージックビデオのドキュメンタリー短編である。



熱心にかたむける参加者



領事(左)と通訳をしている佐光事務局長(右)





数年前に江別の「ドラマシアターども」で行った「寺山修司作品とポーランド文学」以来2度目の朗読会。文学離れが著しい、まして本は目で読むものであり、声に出したり、耳で聴いて感じるものという考えが浸透していない、現在の日本でこのような催しするのは、非常に冒険的であった。しかし、結果的には大成功でありしばらく体験したことのないような、創造的で濃密な時間を過ごすことができた。

前半は、日本人によるポーランド文学の朗読、後半はポーランド人によるポーランド語での朗読と音楽という2部構成にした。まず第1部は、お二方による絵本の読み聞かせから始まった。絵本の絵をどう見てもらうかが問題であるが、今回はプロジェクターを使い、スクリーンに大きく映し出した。「ブラウンさんのネコ」、「タトラのねむれる騎士」どちらもポーランドの児童文学の豊かな伝統を感じさせる素晴らしい作品であった。

また、長屋のり子さん=写真B=はシンボルスカの作品に加え、自作の短歌を披露してくださった。これは日本の定型詩の伝統をポーランド人に紹介したいとの希望からである。ヤセンスキの小説「無関心な人々の共謀」の冒頭に揚げられたロベルト・エベルハルトのことばがとりわけ心に残った。

「敵を恐れるな—かれは君を殺すのが関の山だ。友を恐れるな—かれらは君を裏切るのが関の山だ。無関心な人々を恐れよ—かれらは殺しも裏切りもしない。だがかれらの沈黙の同意があればこそ、地上に裏切りと殺戮が存在するのだ」

第2部は、北大の留学生であり、ジャズボーカリストとしても活躍されているヨアンナ・クンツェヴィッチさん=12頁参照=による歌、「ローズマリーの子守唄」から始まった。キーボードの伴奏は、クラコフの



教会のオルガン奏者であり、現在は北大の客員研究員の札幌在住中のピョートル パヴラクさん。

ジャズのアーティストと、宗教音楽専門の音楽家とのコラボレーションは、素晴らしい化学反応を起こし、会場にいるすべての人が内省的なポーランドジャズの響きに酔った。

続くダニエル・ガエフスキさん=写真E=は、ヨーロッパの地

図からポーランドが消えていた時代にヨーロッパ諸国を回り、ポーランドの文化の素晴らしさを説いたという聖ウルシュラの生涯を紹介し、彼女の手紙の一節を朗読。筆者の中で、なぜかキューリー夫人とマリア・テレサがひとつに重なりあった。

「ひとが祖国を愛するのは、祖国が自由で誇り高い、富に溢れた国だから。しかしポーランドよ、私たちがお前を愛するのは、お前が抑圧され、虐げられているから」

最後の2組は、会場を非常に暖かい、ユーモラスな空気に包んでくれた。まずウカシュ・ザブウォニススキさんのギターと、娘さんのミカエラちゃん=写真F=の鉄琴の共演により、ポーランドの歌を披露してくれた。それまでの芸術的に研ぎ澄まされた空気が和み、ステージと観客の距離が一気に縮まる。最後は、ヨアンナさんとピョートルさんのペアに、マルタ・ジェムツカさん=写真G=が加わり「二日酔いブルース」を披露。これは在札幌ポーランド人のトマシュ・スタシンスキさん(時々、本誌「POLE」に映画論を執筆)のオリジナル作品である。ポーランド語の歌詞の合間に「アタマ・ガ・イタイ」、「ヨッパラウ」などの日本語のセリフを織り込んだ遊び心に溢れたユーモラスな作品に会場全体が笑いに包まれた。

今回は、スタッフ、出演者一同、朗読会の持つ可能性の大きさと奥深さを思い知らされた。また近いうちに、第2弾、第3弾を催したいと思いますので、その際には、ぜひ会員の皆様の参加をお待ちしています。(佐光事務局長)



興味深いポーランド語の映画のポスターを配置
(霜田千代磨さん所蔵)

会場にはポーランド文化や文学を理解するための工夫がなされた



聖ウルシュラを紹介する写真や資料を展示(ダニエルさん所蔵)



A



B



C

<第I部> 日本語の音読

- ◆「ブラウンさんのネコ」
スラヴォミール・ウォルスキ(ヨゼフ・ウィルコン絵) <斎田道子>
- ◆「外ラのねむれる騎士—ポーランドの伝説による—」
アグニシカ・ウメダ再話(越智典子 文) <安藤むつみ>
- ◆「灯台守」から
ヘンリク・シェンキェヴィチ(吉上昭三 訳) <小林 暁子>
- ◆「もの食う人びと」
ヤルゼルスキ将軍(辺見庸 インタビュー) <霜田千代麿>
- ◆「寓話集」から
イグナツィ・クラシツキ(沼野充義 訳) <佐光伸一>
- ◆「昼の家、夜の家」から
オルガ・トカルチュク(小椋彩 訳) <氏間多伊子>
- ◆「シンボルスカの詩」 自作詩 <長屋のり子>



D



E

<第II部> ポーランド語による朗読と音楽

- ♪ 「Kołysanka Rosemary」 W. Młynarski/K. Komeda
「ローズマリーの子守唄」W.ムウナルスキ/K.コメダ
<ヨアンナ・クンツェヴィッチ (Joanna Kuncewicz)> =写真 D=
 - ◆ 「Jeszcze Polska nie zginęła dopóki kochamy」
Urszula Ledóchowska
「愛する限りポーランドは未だ滅びず」 聖ウルスラ
<ダニエル・ガイェフスキ (Daniel Gajewski)> =写真 E=
 - ♪ 「Celina」Tata Kazika 「ツェリナ」 タタ・カジカ
 - ◆ 「Wyznanie」「Historie ludzkie」 Czesław Miłosz
「告白」「人間の歴史」 チェスワフ・ミウォシュ
<ウカシュ・ザブウォニスキ(Lukasz Zabłoński)> =写真 F=
 - ♪ 「Kac Blues」 Tomasz Stasiński
「二日酔いブルース」トマシュ・スタシンスキ
<ヨアンナ・クンツェヴィッチ (Joanna Kuncewicz)
マルタ・ジエムニツカ (Marta Ziemińska)> =写真 G=
- キーボード演奏 ピオトル パヴラック (Piotr Pawlak)



F



G

会場には霜田さん=写真 A=の書=写真 C=が飾られ、和の雰囲気をかもしだしていた。また、懇親会ではポーランドスプのジュレックと数種類のケーキが振舞われた。

在ポーランド共和国大使館 & 在北海道ポーランド人会 主催

PRZYJĘCIE Z OKAZJI PIĘĆSETNEGO POLONIJNEGO OBIADU ŚRODOWEGO

「水曜昼食会」500回記念パーティ報告

ラファウ・ジェプカ



なごやかに行われた記念パーティー 2011/6/5 札幌全日空ホテル

小さなコミュニティから

過去に札幌に住んでいたポーランド人の数も現在住んでいるポーランド人の数も調べ難いです。小樽商科大学の松家仁・准教授の調べによると1930年9月23日にはフランシスコ会修道士のピョートル・フェリクス・ヴィルク＝ヴィトスワフスキ神父が札幌にいました。それは1931年1月25日の『ワルシャワ新聞』に掲載された記事「太陽の国、極東の国、日本から」をご本人が書かれたのでわかります。その後の60年間様々なポーランド人が札幌を訪ねるのですが、一番よく残されるのは研究業績です。はい、北大中心に札幌の大学のポーランド人留学生及び研究者が昔から来ています。

私も1996年に留学のために来札しました。その時にもう既に数人の在札幌ポーランド人の「プチコミュニティ」ができていました。読者の大半がご存知の熊倉ハリーナさんが中心人物になり、時々ポーランド人同士で食事をしていました（時計台の前のロイヤルホストでした）。

水曜日に集うわけとは

大体同じ頃、北大の研究者も食堂で食事するようになりました。日にちは木曜日で参加者は3人を超

えることはなかったそうです。熊倉さんとその研究者が札幌を離れたころ、うちの妻はポーランド語の講義をもつことになりました。2001年の4月でした。毎週の水曜日はお昼までの授業だったので、他のポーランド人留学生に声をかけて北大の中央食堂で集まるようになりました。メールと携帯電話の時代だったため、在札幌ポーランド人のHPを作って、「Polacy Sapporo」(札幌のポーランド人)を検索したら「水曜昼食会」のことが誰でもわかるようになりました。情報がどんどん広がって今のところは40人ぐらいのポーランド人が北海道にいます。実際に参加できる人数は十数人だけですが、メーリングリストに

よって情報交換をして、様々なイベントの計画を皆に届くようにしています。今は「水曜昼食会」だけでなく毎年花見、キャンプ、温泉旅行、スポーツイベントでの応援などのイベントを毎年行っています。

あっという間に500回

2011年7月20日に500回目の「Polish Lunch」を行いました。その機会を祝ってほしいという話が北海道ポーランド文化協会から届いて、金銭的なサポートまで約束されて、平成23年6月5日に、在北

海道ポーランド人の「水曜昼食会 500 回記念パーティー」を盛大に執り行うことが出来ました。大使館のサポートも同時に受け、札幌の全日空ホテルでポーランド料理も味わえる会場でポーランド大使館領事のブワシチック・ジャキモヴィッチさん=写真左=をはじめ、北海道ポーランド文化協会および札幌映画サークルの皆様=写真右=と在札幌ポーランド人とそのご家族が一緒に集まることができました。

記念すべき日

いつも我々を応援して下さる方々のお陰で夢でも見た事がない素敵な場所で北海道の歴史の中で一番多くの在札幌ポーランド人が集うことができました。2時間のパーティープログラムの中にはスピーチとアトラクションなどがありました。1992年からは北海道ポーランド人の情報を集めてきたポーランド文化協会の富山信夫さん及びポーランド文化協会会長の安藤敦教授のスピーチがあつて、「札幌のポーランド人」という写真の撮影会もおこないました。

メインアトラクションとしては在札幌ポーランド人の演奏と歌でした。日本人の参加者が聞いたことはないと思われる、別々のジャンルの3曲を選び披露してきました。ホテルのシェフがピゴス、フラチキ(モツスープ)とスハボヴィ(トンカツ)に挑戦し、様々な次元で感動しました。

この10年に一回しかないパーティーは、北海道ポーランド文化協会の氏間多伊子さん及び佐光伸一さんにはなみなみならぬ、お力をお借りいたしました。

また、富山信夫さんをはじめ多数の方々から貴重な情報と写真を提供していただきました。この記事の場をお借りしてお礼申し上げます。

「ポーランド」というつながりで皆様と楽しい時間が過ごせることはとても嬉しく思っています。これからも引き続き北海道でポーランドと日本の交流を行ってきたいと考えています。今後とも皆様方の更なるご協力とご支援をお願い致しまして御礼のご挨拶とさせていただきます。

(報告=北大情報科学研究科・当協会運営委員)



↑ 来年の映画祭のパートナー「札幌映画サークル」の面々も招待された

← 映画情報にも詳しい領事との交流

- アレクサンドラ・ヤヴォロヴィッチ
- ヨアンナ・クンツェヴィッチ
- アグニエシュカ・クサマ
- ミツ・クサマ
- ナディア・クサマ
- アンナ・パヴラック
- ピオトル・パヴラック
- セバスティアン・パヴラック
- アグニエシュカ・ポヒワ
- ユキコ・プタシンスキ
- ミハウ・プタシンスキ
- ハナ・プタシンスキ
- ヨランタ・シマダ
- ニコラ・シマダ
- ジュリアン・シマダ
- カロリナ・ザブオニスキ
- ウカシュ・ザブオニスキ
- ミカエラ・ザブオニスキ
- マルタ・ジェムニツカ
- マルチン・ヤンチャレック
- ミハウ・マズル
- アキコ・タケヤ
- トマシュ・スタシンスキ
- エディタ・ジェプカ
- ラファウ・ジェプカ
- ミコワイ・ジェプカ
- 一キロロからの参加ー
- アンドジェイ・シヴィルコヴスキ
- シモン・グレジュック
- ヨアンナ・コヴナツカ

29人のポーランド人が集う記念すべき日になった



♪ GDYBYM MIAŁ GITARĘ

Gdybym miał gitarę
To bym na niej grał
Opowiedziałbym o swej miłości
Którą przeżyłem sam .
A wszystko te czarne oczy
Gdybym ja je miał
Za te czarne, cudne oczęta
Serce, dusze bym dał.
Fajki ja nie palę



「もし僕がギターを持っていたら」 ♪

もし僕がギターを持っていたら、
ギターを弾いて、
僕が自分で体験した愛について
語る事ができるのだけど。
そうこの黒い瞳こそすべて
もし僕がその瞳を自分のものに
出来るならこの黒くて、奇跡的な瞳のために
心と魂をささげることができるのだけど。
僕はパイプを吸ってるわけじゃないよ。



(アトラクションで披露された歌のひとつ)

ポーランド留学生と 私の 20 年

富山 信夫

外国で勉強してみたい！

今から47年前(1964年)のこと、ポーランドはビドゴシチの農業試験場で、親切にお世話いただいたパヴェウスカ博士が「あなたはまだ若いのに、会社代表として海外研修できるのは幸せですね！私等研究者も西側国で勉強してみたいが、現状では無理！あなたが羨ましい！」と。

今でも忘れられない言葉であった。

ビドゴシチからアンナさん

それから26年後(1990年)、懐かしいビドゴシチ農試から若い研究者アンナ博士が遺伝・育種学研修のため北大農学部に来られた。「パヴェウスカ博士は引退されましたが、お元気ですよ。ショータ博士は現所長で、私は今ヤッセム博士の下で働いています」と。1992年28年振りでビドゴシチを訪れた折、

アンナさんのお世話で懐かしいショータ所長・ヤッセム博士ご夫妻・パヴェウスカ博士と旧交を温めることができ、「世界は狭くなりましたね！」と。

今まで知り合った留学生は50人

その後、灰谷教授や熊倉ハリナさんの紹介で、留学生と知り合い、更に水曜昼食会でヤギェウオ大学・アダムミツキエヴィッチ大学・ワルシャワ大学等からの多くの留学生と交流を続けている。

1993年文学部に留学された皆さんご存じのワタさんは現在ポーランド政府観光局長として活躍中で、昨年の「ポーランド・デー in 札幌」では久しぶり来札された。また'95年皆さんご存じのマジェーナさんと一緒にスラブ研で勉強されたマウゴジャータさんの学位論文は、「千島アイヌの軌跡」アイヌ文化良書(日本語)として刊行された。当時、一番若い留学生ラファウさんは北大で学位をとり、現在情報科学研究科助教として北大学生の指導に当たっている。

また、先日の東日本大震災に際し、マジェーナさんを始めダリウシ博士など多数の帰国留学生の方々から、心配と見舞いのメールを受信、有難いことであった。この20年間札幌で知り合った方々を数えてみたら、留学生は約50名、その他ポーランドの方々は約30名にも達した。

47年前のパヴェウスカ博士の言葉を思い出しながら、時代の変化と世代の交代を感じること一入である。

(文・写真=とみやま・のぶお)



(左から)
パヴェウスカ博士、ショータ所長、
アンナ博士 [1992 ビドゴシチ]



(後列左から) Dr.ダリウシ(農)/Dr.ピオトル(理)/ラファウ(日研) (前列左から) マジェーナ(ス研)/富山(筆者)/Dr.ボグスワーヴァ(工)/マウゴジャータ(ス研) [1997 北大]

「水曜昼食会 500 回記念パーティー」では、聴衆の前で、ラファウ・ジェプカさんから深い感謝の言葉がむけられた富山さん。また、過去をさかのぼると「ポーランド語講習会」を維持された功績も大きい。15周年記念誌によると、1985年5月に開講し、2000年11月で30期のべ325人が受講している。協会を支え続け、会の活動を丁寧に写真や資料として記録なさっている富山さんには、感謝と共に頭の下がる思いでいっぱいだ。(編集人)

日本（北海道）とポーランドのつながり

－身近にあった友好親善の絆－

尾形 芳秀

ポーランド人女学生フランシユカ

ポーランドは日本から距離にして 11,000 キロの彼方にあります。本当に遠い国です。しかし、両国が身近なところでお付き合いがあったことを知る人はほとんどおりません。今、北海道庁赤レンガ館に一枚のポーランド人女性の写真が掲げられています。あまり目立つパネルではなく目に止められる人も少ないと思われます。



1931年、樺太庁立豊原高等女学校時代のフランシユカ・チェフスカと級友。

この写真は、今はなき樺太時代のものです。写真の説明には「豊原高女に学んだポーランド人女性」とだけ書かれています。樺太にポーランド人の女性がいた？きっとロシア人女性の間違いではないか？と思われる方もおられることと思います。

豊原高女とは、当時の樺太庁の主都豊原市にあった学校で、当時の若い女性の憧れの的でした。全国から移民がきており優秀な人材が集まっておりました。胸のスズランのバッチは彼女らの誇りでもありました。

そこになんとポーランド人女性が学んでいたのです。それも戦前の皇国史観の教育です。彼女は残

豊原高女時代のオーシップ・フランニャ(左端、正しくはフランシユカ・チェフスカという)。樺太全島高女の発表会では、声楽部門で豊原高女を代表していた。



留ロシア人や残留ポーランド人がいるなかで率先して日本の学校で学んだパイオニアでした。

名をフランシユカ・チェフスカと言いました。当時の日本人はロシア語やポーランド語が分からなく、耳で聞いた発音で「オーシップ・フランニャ(いずれも愛称で、フラーニャとも)」と長いこと間違っ呼んでおりました。

彼女は樺太生まれですが、祖父母はポーランドの身分制度で「シュラフタ(士族)」でした。しかし、当時のポーランドは 123 年間もの長きにわたり帝政ロシアに統治されており、そのため何度も独立のための蜂起がありました。その過程で蜂起扇動の容疑をかけられ銃殺刑にされたのです。その子供(彼女の父親)も連座して、たった一人でサハリン島に流刑にされていました。その父親の子供がこの写真の女性なのです。

移り変わるサハリン

サハリンはもともと日露の混在地でしたが、1875年の樺太・千島交換条約により、サハリン島はロシア領、千島列島は日本領となりました。しかし、1904から5年にかけての日露戦争で、サハリンの南半分は再び日本領となりました。日本はこの樺太侵攻作戦を「樺太回復作戦」と呼びました。それはもともと日本人が発見した島という観点から旧に復したというものでした。

この南サハリンには、ロシア人や帝政ロシアが統治する国々から流刑囚が送られてきておりました。日露の戦後協定でこれらの人々は、この島に残ることも可



1906年頃、日本が奪還した頃のウラジミロフカの集落。その後「豊原」となる。更に、その後は「旧市街」と呼ばれるようになった。

能でしたが、日本側の残留資格の審査は大変厳しいものでした。従ってこの審査に残ったのは僅かな人々でした。残留ロシア人等は母国に帰るに帰れない人々だったのです。

それに引き替えポーランド人達は、まず家や家畜の財産があり、家族もおり相当の自活能力があると判断され残留許可がでたのです。ポーランド人達は、本当は日本の勝利で、帝政ロシアの長い呪縛から解放され、ようやく自由の身になったわけですから、一刻も早くこの悪夢のような島から母国に帰りたいと思っていたことでしょう。

しかし、この時期のポーランドは、まだ帝政ロシアに統治されており、帰ったとしても再び悪夢が繰り返されることも考えられました。そこでアジアの小国日本が大国ロシアに勝利したことは、母国の独立のために学ぶべき点があると考えたのでしょう、そこで日本領樺太に残る道を選んだのでした。

彼女が率先して日本の学校に学んだことにより、他のポーランド人の子供たちも追随するようになり、1930年頃にはロシア人も学ぶようになりました。ポーランド人の子供たちは日本の学校で学ぶ一方で、豊原の天主教会（カトリック教会）でポーランド人神父からポーランド語やロシア語を学んでいました。ロシア語を学んだのは母国がロシア化されていたためでした。

樺太でのポーランド社会

紙面の都合で簡略して書きますが、彼女の家を初めポーランド人たちの家は、樺太の各地に分散して住んでおり多くは大家族でした。そして、ロシア人達のように僻地にひっそりと暮らすのではなく、みんな日本人社会の目の前で堂々と住んでおりました。そして、みんな教養の高い人々でした。丸太小屋の建築、営農、畜産などに秀でておりました。北方圏での知恵が随所にありました。

日本人は北方圏の営農は知らなく随分と遠回りしましたが、彼らから学ぶことが多かったのです。

樺太は不思議な島です。もともとは北方民族が幾種族も豊かに住む島でした。現在であれば北方民族の住む世界遺産のような島でしたが、今は残念ながら見る影もありません。現在では樺太時代のポーランド人の多くは1948年に島を離れました。大半は母国に帰りましたが、母国ポーランドを初めウクライナ、ドイツ、フランスなどに住んでおりました。現在サハリンにはポーランド人の残留者は数人となりました。その中には日本人と結婚したポーランド人もおりました。

時は流れフラワーニャは、戦後に開かれた豊原高女の東京同窓会に何事もなかったかのように出席しています。他のポーランド人の多くはここ15年ほどの間に相次いで亡くなっています。

樺太を訪れた人々

樺太のポーランド人社会では彼女の家が中心でした。そのためか国内外の要人が訪れています。



1935年頃のオーシップ家(チェヴスキ家)、日本家屋の三戸分ほどあった。子供を13人を生むが生存は8人であった。右手に大きな牧場があった。遠くの工場は樺太製糖の工場。

最初は1920年頃に、駐日ポーランド公使・スタニスワフ・バテックが、いち早く樺太を訪れ同胞に会っております。そして同胞の念願であったポーランドのパスポートを取得します。

次いで1930年には、松田源治拓務大臣が自宅を訪問しています。

1934年には、ポーランドの紀行作家アレクサンドル・ヤンター・ポチンスキが同胞たちを訪問しています。ポチンスキの表向きの訪問目的は独立後のユゼフ・ピウスツキ大統領[*]の命によるものでした。ユゼフは兄ブロニスワフ・ピウスツキ[*]の妻子を探すことでした。ブロニスワフこそ、樺太アイヌの研究で世界の第一人者と評せられる人物です。彼の妻は樺太の相浜に住む樺太アイヌのシンキンチョウ(チュフサンマとも)でした。樺太を舞台にポーランドの独立運動家と、樺太アイヌ研究家が兄弟だったことは本当に驚きです。

他にも1920年代には、ロシア革命の混乱から北

サハリンからの亡命ポーランド人もおりました。兄ブロニスワフは、1904年にサハリンを離れます。日本が大国ロシアに勝ったことで、思い立ったのでしょう。それはポーランド独立のために戦っている人々を外国から支援するためでした。

次いで、シベリア出兵中の日本軍が、シベリアに家族とともに抑留されていた飢餓のポーランド人の少年少女たち約750人を三度にわたり救出します。この子供たちは日本の神戸で療養したあと米国やヨーロッパへと旅立ちます。

1938年には駐日ドイツ大使館のハンス・オットー・マイスナー一等書記官も訪問しています。フラーニヤの父ユゼフは日露戦争時この地で起きた戦闘の様子を話しています。彼こそ日露戦争時の最後の決戦地となったウラジミロフカの戦いの生き証人だったのです。

他にも樺太とは直接関係しませんが、1940年には、ナチスドイツに追われてポーランドから隣国リトアニアに脱出していた人々に対し、リトアニア領事杉原千蔵の命のヴィザの発給も忘れることはできません。

それでは、札幌になぜポーランドとの関わりを示す痕跡があるのでしょうか。それは、樺太は北海道

の一部だったからです。1943年にそれまで外地だった樺太が本土の北海道に併合されたのです。

冒頭一枚の写真だけでは寂しげで、この説明だけでは何も理解できません。また、彼らに関する記録もほとんど残されておられません。僅かに豊原旧市街の人々だけによるものです。この人々を説明できる人は樺太出身者にもおられません。いるとすれば豊原旧市街の人々でしょう。

それは長いこと樺太の官憲(憲兵や特高)が彼ら残留や亡命人を敵国ロシア人として流布し市民に監視の目を向けさせていたからに他ありません。彼らの樺太時代は辛く悲しい時代でした。彼らは「我々は決してロシア人ではない」と血の叫びがあったのです。

私は、戦後ずっと彼らを思いつつも彼らの消息は長いこと不明でした。私は、55年振りに彼らの消息を探し当てることができました。再会した時には「日本の人々に感謝すれこそ、悪い感情はありません」と静かに話されたことが印象的でした。

日本にはポーランド大好き人間が多いと言います。ぜひ、身近なところで日本とポーランドの繋がりがあったことを知ってほしいと願っています。

(おがた・よしひで)

著者紹介



私は1937年に樺太の豊原に生まれました。私が樺太の残留や亡命ポーランド人と言われる

人々について関心をもっているのは、彼らと樺太の豊原で、同じ旧市街で育ち、遊び、同じ学校で学んだ経緯があるからです。彼らに関しては、戦前ならいざ知らず現在でもロシア人とみなす人がおり残念に思っていました。何とか彼らの消息を探して、名誉を回復したいと長いこと考えていました。彼らの消息については2000年頃までは不明でした。彼らは未だサハリンに留まっているのだろうか、それとも母国へ帰国したのだろうか、まったく手がかりはつかめませんでした。

その後ある情報からすべて判明することになりました。彼らは、確かに帝政ロシア時代にいわれなき罪状を付けられポーランドや東ポーランドの地から極東の最奥地の

島へと流刑になりましたが、決してロシア人ではなく、誇り高きポーランド人だったのです。1905年の日露戦争で、日本の勝利により、彼らは帝政ロシアから漸く解放されたのです。樺太に残留するといっても、亡命したわけではありません。あくまでも母国に帰る時を待っていたのです。

しかし、戦前は相次ぐ戦争状態で、日ロ国境の島はスパイの潜入で緊張の連続でした。日本人はロシア人とポーランド人の区別がつかなかったのです。そのため官憲は無謀にも残留や亡命してきた人々をロシア人と看做すことで国民に監視の目を向けさせたのでした。

ポーランド人たちはこのような差別には大変心を痛めておりました。ロシア人との差別化を図るために「樺太波蘭人会」まで作り同胞を守っていたのでした。

私は、このような経緯から、ポーランド人との出会いを大切に、樺太時代の彼らの真実を語り継ごうと考えているのです。



[*] ふたりのピウスツキ

ポーランド独立運動の闘士で初代大統領ユゼフ・ピウスツキ元帥=写真=には兄がいた。兄の名はブロニスワフ・ピウスツキ(Bronisław Piłsudski)。

日本(北海道)との関係は特に深い。反ロシア活動でシベリアに流刑になるが、学者でもあったブロニスワフはアイヌ研究者。当時の樺太にも足を運び、最新式の蝋管蓄音機を使ってアイヌ語を録音した。1983年にはポーランドのザコパネに残されていた64本の蝋管が北海道大学に貸与され、ピウスツキの資料研究の再生、分析が行われた。このブロニスワフは樺太のアイヌ女性との間に一男一女をもうけ、戦後、子供達は日本に引き上げた。(編集者)

ポーランドの第二の都市、クラクフの出身です。仕事の経験を増やし、魅力的な人に出会い、そして私にとって全く新しい文化を知るために今年の3月末に札幌にやって来ました。私は若い研究者で、そそっかしい性格で、人生のさまざまな分野で自分の居場所を探し求めている人間です。

音楽は私の人生の中にいつもありました。音楽に対する愛を教えてくれたのは父で、彼は家ではよく歌ったりギターを弾いたりしていました。10歳の時、私は自分でもギターを弾くことを覚えました。とはいえ、子供の時に音楽学校に通わなかったことを今でも後悔しています。

他の道に進み、自分の第2の情熱を育むために、体育学校で学び始めました。専門競技は走り高跳びで、現在でももっとも優秀な選手のひとりに数えられています。私のスポーツにまつわる冒険はおよそ11年間続きました(ポーランドの全国大会でジュニアとユースの部で2回準優勝しました)。

化学大学の4年生の時に、学問のためにトレーニングを諦めました。高校そして大学で学んでいる間も、音楽に対する情熱から離れたことはなく、いつも世界中の音楽に囲まれていました。音楽に触れ、音楽の才能を伸ばしたいという気持ちが強くなり、クラクフのヤギェウォ大学で博士課程を始まるとすぐに、クラクフのジャズスクールのジャズボーカルのクラスで学び始めました。そこでは素晴らし



私はヨアンナ・
クンツェヴィチと
申します。



♪ 「Kolysanka Rosemary」 (ローズマリーの子守唄)
をしっとりとうたうヨアンナ。聴衆はひたすらきき惚れた。

い人と卓越した音楽に出会いました。人との新たな触れ合いが友情へと発展し、ジャズトリオを結成することになり、クラクフのジャズクラブのコンサートに出演し始めました。ジャズスクールは4年間学んだ後に卒業しましたが、音楽への衝動があまりにも強かったため、カトヴィツェの音楽大学のジャズ学科の正規のコースに

通うことになりました。

音楽大学の1年生の時に化学の分野で博士号を取りました。その時に、北海道大学の触媒化学研究センターの大谷教授の実験室でポストドクターのポジションを提案されました。私は新しく始めた学校での仕事と音楽の勉強を一時的に中断しこのチャンスを利用することを決めました。日本でも自分のこの情熱を育むことができると期待したからです。

札幌での滞在の初めから自分の音楽への陶醉の証を、とりわけポーランド語の曲を機会があればいつでも見せようと披露しようと努めてきました。とりわけ北海道ポーランド文化協会が企画した「午後のポエジア」に出演しました。日本でのこの音楽の冒険は、自分の音楽の創作活動に対するインスピレーションとなるのではと、私は期待しています。

音楽は私にとっては単なる趣味ではありません。音楽は私の内面にずっと離れずに存在しています。それがコンサートであっても、家でも、通りでも、実験室でも、どこでも。それに逆らい、それを抑え込むことはできません。歌いたいという欲求を感じ、そう出来ない時、私は不幸です。

しかし求めるだけでは充分ではありません。自分の能力を伸ばすことは時には困難でつらい作業です。でも、自分が伝えたいと思うことに人が耳を傾け、時にはほほ笑み、休息し、気分を変え、内省的になっていると感じることが出来る時、それは奇跡的な瞬間となります。



五・七・五の17音を定型とする短い詩<俳句>。
ふたりの俳人“陽石” & “千代磨”による<新連載>がスタートします。

ポーランド & ニッポン歳時記

<ポズナン在住。ポーランド人女性 陽石さん>

幼いころから文学に親しみ、特に日本の文学に興味を覚える。俳句は三年前から詠みはじめる。

<岩見沢市在住。霜田千代磨さん>

1992年より作句する。伝統俳句協会会員。現代俳句協会会員。北海道俳句協会選者。「夏至」同人。

家々の間^{あいた}を猫の春探し

koty wędrują
między kamienicami
szukając wiosny



錠を手に

鍵屋を探す

春陽気

z zamkiem przez miasto
wędruję do ślusarza
w marcowym słońcu

小莓の

ゆるりと熟す

賢さや



jest wielka mądrość
w powolnym dojrzewaniu
małej truskawki

棕鳥め!

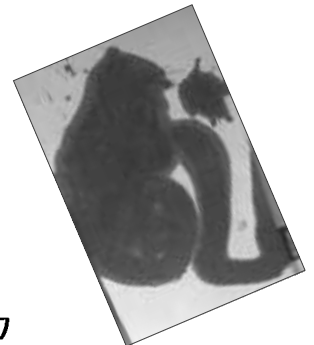
桜桃守る

少女かな

szpaki latają
dziewczyna pod gałęzią
czereśni strzeże

大鎌をふり上ぐ大地
夏至の天

(季語|夏至の天)



カッコウと啼く郭公の大気温

(季語|郭公)

クラークの目線の先の花野かな

(季語|花野)



曇天や

ワタシの名前

クレマチス

(季語・鉄マチス線)



書 (しもだ・ちよまる) 上から


「乱」—創作—

カイキョウ カクヨウ

「開 匈」「赫 耀 (赤々と光がおどるさま)」

—顔真卿の裴將軍詩の文字から—

ポーランド人女性監督
映画『木洩れ日の家で』を
みてきました！



東京・岩波ホールで上映されていたこの作品は(70号2頁で紹介)、苫小牧・函館・札幌でも順次公開されることに・・・ひと足早く苫小牧へでかけました。



創業大正8年。洋食の文化を伝えてきた第一洋食店。レトロなお店でのおしゃべり。

8/6(土)朝、車で札幌を出発！まずはウトナイ湖付近にある「イコロの森ガーデン」を散策。ガーデン内の森の食卓トマティーヨで新鮮なハーブや野菜のランチ。その後、市街地へ移動し、シネマ・トールラスでチケットを購入。上映までの待ち時間を、向かいのお店でお餅や蕎麦をいただきながら過ごす。定刻になり映画鑑賞。せっかく来たからには、はずすわけにはいかない苫小牧

駅付近の「第一洋食店」へ。コーヒーやハスカップのデザートをいただきながら「語る会」。札幌にもどり平岡公園そばの蕎麦「さくら」で夕食をいただきながら、さらにおしゃべり。暮れなずむ頃、解散。

「ポーランド現代映画セレクショ 2004-2009」の実行委員だったメンバーで出かけた真夏の午後の映画鑑賞ツアーは、舌の感覚や映像とともに参加者のココロと記憶にしっかり刻まれたに違いない。

2012年5月7-8日には今年と同じ北大学術交流会館で「ポーランド映画祭(仮題)」を企画する。いまからポーランド作品を要チェック。実行委員も募集中！事務局までご連絡をおねがいます。

子どもを主人公にした傑作の数々で注目のポーランドの女性監督**ドロタ・ケンジェジャフスカ**。そして、現在では製作が非常に難しい驚異のモノクローム映像を実現させたのは、ドロタの夫でもあり、本作ではプロデュースも手掛ける**アルトゥル・ラインハルト**。

他にも次のような作品があります。

- ◆ひとりの少女とジプシーの一団との触れ合いを描いたデビュー長編作『ディアブリー・悪魔(Diably, diably)』(1991)
- ◆少女の成長をみずみずしい映像で見せる『カラス達(Wrony)』(1994)
- ◆両親の愛に満たされない少年と少女の悲しい交流を描く『僕がいない場所(Jestem)』(2005)

苫小牧シネマ・トールラスの前で



参加者ひとこと

ポーランドの名女優を主人公にシナリオを当て書きして撮り上げたというだけあって、撮影当時91歳だったという女優ダヌタ・シャフラルスカ無しにはこの映画は成立しないと思う。人は人生の終わり方を色々思い描くけれど、自分の思い通りには終われないことは分かっている。それでもこの映画のように人生の終わりを迎えられたらと思うのである。

中村京子(写真上左端)

主人公アニエラがやるべきことをすべて終え、ブランコにのる場面は映画史の中でもっとも美しいシーンのひとつだと思った 佐光伸一(右2人目)

モノクロームのスクリーン。美しく老いた女性アニエラ、愛犬フィラ、そして最小限のセリフ。アニエラの残された生を回想と共に描いて行く。悲しげな愛犬フィラの瞳がスクリーンいっぱいに表現する。己の人格を失うことなく、終えようとする命。映像の美しさに釘付けになった。家の回りの林が美しくその木々の上から風が大きく小さく吹く。何という美しさ。森の木をゆらしながら、アニエラは旅立って行った。

山本弘子(左2人目)

古い木造の家とガラス窓を巧みに使ったこの作品は主人公アニエラとともにモノクロームの画面がふさわしい。人間の欲望の襞を描いた点もいい。犬のフィラは助演賞モノである。派手さはいが静謐なる佳作。

佐藤晃一(中央)

深い美しさと哀しさと気品で、死生観をあぶりだした映像に心酔。ただひたすら感謝あるのみ。

氏間多伊子(右端)



『木洩れ日の家で』

原題 「死すべき時」
Pora umierać
2007年 ポーランド
1時間44分

【監督】

ドロタ・ケンジェジャフスカ

【出演】

ダヌタ・シャフラルスカ、
クシユトフ・グロビシュ



シアターキノ
(中央区狸小路6丁目)
10/15～上映予定

2010-2011 年度

総会にお越しく下さい!

- 2011.10月21日(金)
- 北大クラーク会館 3F
国際文化交流活動室(北8西8)
18:30~ 総会
19:00~ 懇親会

(年会費の納入も申し受けます。他にパーティー代として3千円位)

後日、「往復はがき」を郵送しますので、

- ①出席の方は参加人数を記入し、欠席の方は返信ハガキ(委任状)にご記入の上、投函してください。
- ②懇親会では、お子様、ご家族での参加、ご友人をお誘い合わせのうえお越しく下さい。楽しいひと時を過ごしましょう!



**創立25周年を迎えます
~事務局から~**

私たちの「北海道ポーランド文化協会」が設立されたのは1987年10月のことです。これからの記念イベントは会誌等を通してお知らせいたします。

そこで皆様に二つのことをお願い致します。ひとつは積極的にご参加及びボランティアとしてお手伝いくださること。さらに、会員拡大のため、周りの方へのお声掛けもお願い致します。(15頁の会付き入会申込書を使用)

今日までポーランドの文化の紹介にささやかですが努めてきました。引き続き輪を広げ、ひとりでも多くの方とともに次へのステップアップをはかりたいと思います。

同時に10月から本協会の運営委員を募集しています。例会などの催しの企画、会報「ポーレ」の編集などを一緒にやりませんか?是非あなたのお力添えをお願いします!

今後の活動予定



- ◆<第58回例会>
ポ文協の修学旅行
~池田町 ワイン祭り~
10月1-2日(土日) 札幌-池田

- ◆<第26回>
総会&懇親会 ポーランド人無料
10月21日(金) 18:30~
北大クラーク会館 3F 国際文化交流活動室

- ◆<第59回例会> **会員無料**
ポーランド映画祭(仮題)
2012年5月5-6日(土日)
北大学術交流会館 2F 講堂

- ◆<創立25周年記念>
ピアノコンサート
2012年5月12日(土)
18:30~予定 キタラ 小ホール

会誌「POLE ポーレ」原稿大募集!

- 旅の思い出 ■
- 友との交流 ■
- 好きな映画 ■
- 好きな作家 ■ など。

ポーランドに関することならテーマ、字数は自由。ぜひ皆様のポーランド体験を教えてください。ご連絡は事務局まで。



会費納入のお願い

2011年10月から新しい年度がスタート。今年度が未納の方は恐れ入りますが、2カ年分の納入を宜しくお願い致します。

【郵便振替口座】

02740-5-19735 北海道ポーランド文化協会

- ◆普通会員(年額) 3000円
- ◆維持会員(年額1口) 5000円
- ◆学生会員(年額) 1500円



POLE

第71号

ポーレ編集委員会

氏間多伊子/栗原朋友子/小林美保/
越野 剛/佐光伸一/ラファウ・ジェブカ

北海道ポーランド文化協会会誌

POLE 第 71 号 (2011 年 9 月)

目 次

| | |
|--|----|
| 薄井豊美「北海道ポーランド文化協会コンサート [2011.6.4] を終えて」、「プログラムノート」 | 1 |
| 氏間多伊子・佐光伸一〈第 56 回例会報告〉「領事来札記念映画上映会『ショパンのワルシャワ』、『フレデリック 2010』」 | 3 |
| 佐光伸一〈第 57 回例会報告〉[第 1 回]「午後のポエジア」 | 4 |
| ラファウ・ジェプカ「[駐日] ポーランド共和国大使館&在北海道ポーランド人会主催 PRZYJĘCIE Z OKAZJI PIĘĆSETNEGO POLONIJNEGO OBIADU ŚRODOWEGO [ポーランド人]『水曜昼食会』500 回記念パーティ報告」 | 6 |
| 富山信夫「ポーランド留学生と私の 20 年」 | 8 |
| 尾形芳秀「日本（北海道）とポーランドのつながり—身近にあった友好親善の絆」、「ふたりのピウスツキ」 | 9 |
| 「私はヨアンナ・クンツェヴィチと申します。」 | 12 |
| 陽石 [津田モニカ]・霜田千代麿〈ポーランド&ニッポン歳時記〉 | 13 |
| 氏間多伊子「ポーランド人女性監督映画『木漏れ日の家で』をみてきました!」、参加者ひとこと（中村京子、佐光伸一、山本弘子、佐藤晃一、氏間多伊子） | 14 |
| [事務局より][第 25 回] 総会にお越しく下さい、今後の活動予定：ポ文協の修学旅行～池田町ワイン祭り、[第 25 回]総会&懇親会、ポーランド映画祭、〈創立 25 周年記念〉ピアノコンサート | 15 |